



鳳巾の晴

狸廻之部

四



橋津

大坂

三月既而初とをち依之の船に打寄り  
はなとよるに初由さるはよりぬちちさ  
りてえいおくは旅持のちちちちち合  
一人こと世さかす橋津漢くさる物也  
あしゆははのちよそに河原をたふす  
泉明よのゆゆはつられて後笑の園  
に一こちちちちちちちち

管の葎とらちて 野小柳のれ

三平坊

流あしあさくおまの氣晴

泉明

記



才程いよ下結はくゆいりて  
之花

象越一とつりのあはらこら只  
宇林

三つくもて月のあゝゆのまぢちされ  
栗州

はとよ一羽二おの初丁  
春水

おーはに別て按摩とそろくと  
古籙

恋てまよのうらるる香具屋  
南湖

緑月の清も有るゆふと  
朱沈

さよふ遠水もま葉の層は  
紅杏

出のりりし心のむれさあつと  
孝道

まこいふ月のあはらと  
瓢之

お葉のあの一やう何れまを  
明

妻一ぬちとる中記あり  
花

森つそぬや春のそをれ都云  
水

刺れは悟れぬのーとさうら  
籙

何とそやゆと志志一の葉はあり  
湖

あまも海して志賀のまゝ  
秋

凡書

をよほする日の月此入るや  
 穢懐くの垢離山林を  
 お祈りのおゝきうし出でやう  
 せりありのそよ川窓  
 半はくも花この後にもあれき  
 そぬゆうりをむさうふあはふ  
 手 林 叶 之 乃 香

談ふ

之本所の筑紫の脚と兵庫の海を

又送るにたもて思ふよぬたを難波の  
 するはよ運んんと約して

けりしむけなる日清ん赤くき  
 宗明

長庫

長岡多の晴天を訪て毎洛川よりぬ帆の  
 作のてよりよよまよ一まをの溪よまを  
 子八本何まよま子八まをて送るまは  
 流山子う河まよしてまをそのゆるまは  
 よはなまわわうまをくたの氣まよま  
 流山ままままよ一のまを子何まを  
 心の乃まをまよ一のまのまを風程の

おの世話よりあつらひし此日と永  
おの世話よりあつらひし此日と永  
おの世話よりあつらひし此日と永

つ小坊

おの世話よりあつらひし此日と永

いつれをいつの綿のやよあ 糸梅

あつらひし此日と永 糸梅

牛の車はひよと推してあり 露山

笠石の月の目利はるるあ 舟中

教入よと推してやるあ 可也

むし加し程言さるるあ 重南

まやりの流義のあつらひ 和琴

近頃は皆すれあつらひ 如洞

はく流のあつらひ 羽圭

有とあるあつらひ 半荷

娘のあつらひ 孤芳

碓氷の尻痛撫たよあ 禹桃

恒井はよとあつらひ 文丈

2

2

安<sup>イ</sup>とれ<sup>レ</sup>あ<sup>ウ</sup>晒<sup>シ</sup>ま<sup>ケ</sup>け<sup>レ</sup>た<sup>メ</sup>で 飛橋

志<sup>シ</sup>せ<sup>テ</sup>あ<sup>ル</sup>用<sup>ト</sup>と<sup>ル</sup>り 可<sup>ク</sup>良<sup>シ</sup>

教<sup>ケ</sup>れ<sup>ル</sup>新<sup>ニ</sup>邊<sup>ノ</sup>教<sup>ト</sup> 芳<sup>ホ</sup>石<sup>シ</sup>

嫁<sup>メ</sup>返<sup>ル</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 栢<sup>ヒ</sup>洞<sup>ツ</sup>

青<sup>アヲ</sup>月<sup>ツキ</sup>し<sup>テ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 浦<sup>ウラ</sup>玉<sup>タマ</sup>

林<sup>ハヤシ</sup>上<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ト</sup> 杜<sup>ツ</sup>良<sup>カ</sup>

淋<sup>シ</sup>木<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>丁<sup>チヤウ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 敏<sup>ミン</sup>馬<sup>バ</sup>

栗<sup>トシ</sup>よ<sup>ク</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 依<sup>ヨ</sup>登<sup>ト</sup>

噴<sup>フキ</sup>ゆ<sup>リ</sup>七<sup>ナナ</sup>樓<sup>ロウ</sup>秘<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>り<sup>ト</sup> 布<sup>フ</sup>

さ<sup>ッ</sup>り<sup>リ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 依<sup>ヨ</sup>登<sup>ト</sup>

谷<sup>ヤ</sup>録<sup>ロク</sup>

浪<sup>ナミ</sup>柿<sup>カキ</sup>の<sup>ノ</sup>こ<sup>ノ</sup>ろ<sup>ノ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 浦<sup>ウラ</sup>玉<sup>タマ</sup>

皆<sup>みな</sup>を<sup>も</sup>し<sup>テ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 乃<sup>ノ</sup>中<sup>チュウ</sup>

表<sup>ウラ</sup>雨<sup>アメ</sup>の<sup>ノ</sup>晴<sup>ハ</sup>る<sup>リ</sup> 杜<sup>ツ</sup>良<sup>カ</sup>

庭<sup>ニワ</sup>り<sup>ノ</sup>ま<sup>ダ</sup>に<sup>テ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 依<sup>ヨ</sup>登<sup>ト</sup>

紅<sup>ベニ</sup>梅<sup>ウメ</sup>や<sup>ハ</sup>あ<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup> 依<sup>ヨ</sup>登<sup>ト</sup>

初丁ややく日よきをゆり 梅洞

涼風と押し出さるる花の石 亦梅

各縁 所中泊連

起しよよと座をこも花の海をまじ 完太

馬を睡くやふし出にの柳を 半宿

よふ時をいづる心よとよ火燈の 敏馬

瓜茄子片くりに背戸の涼ふ 重南

くくすれ悟り連の心木蓮花 孤芳

進んでまご時を何事と長繩も 可也

一と桶片くみおりの珠もま 露山

あしと雨ちうくつり梅の香 可也

清佛やま子「の心」の解法 文太

白睡て千るんなるよん丸 和琴

古橋し瓶の紙る小ま丸 無核

あしに乳のるくさちやあま 羽玉

あまの糸や紙のこころくさちやあま 右布

梅の青も山と世の人の世の凡 大坂 寄石

細子もよあそびの流のたはら月 全 如泊

よふはくも気もなかりての所相識 有る 禹枕

議

御傍りの花はとけはなれどさうさき藤  
子流りてさきさきよ日と供うん又や  
まよふあそびの心とて思ふもまよふも  
ゆらんもさきさきと流はるの流のをよと  
とらりてさきさきと舞金に流を約  
郊外に送るもさきさきとあつちり

又とよふ一字にまよふ水 尔梅

送

よふ御傍と送るとかたさきさきさき  
は花の流はるよ日と供うん又や  
まよふあそびの心とて思ふもまよふも  
ゆらんもさきさきと流はるの流のをよと  
とらりてさきさきと舞金に流を約  
郊外に送るもさきさきとあつちり

よふとよふのまよふ水 爾梅

よふ



まじりておのれに古のよと出るをさして  
送るもふくたけくもくもくもくもく  
風物よもわく起るのよとけとけと  
花鳥よもわく起るのよとけとけと  
武原の浦をわたりて川を  
さゆのよとけとけとけとけと  
れさるもわく起るのよとけとけと  
さしやとけとけとけとけと  
教へるもわく起るのよとけとけと  
己亦たわく起るのよとけとけと  
まじりておのれに古のよと出るをさして

きーくわく けーくわく ーくわく

きーくわく

須丁

きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく  
きーくわく けーくわく ーくわく

おのれに古のよと出るをさして

きーくわく

飯茶

きーくわく

園下

梅の葉は冬に白く  
よりの葉は冬に赤く  
赤くは冬に白く  
の流れは冬に赤く

折るは冬に白く

綿の葉は冬に白く

梅の葉は冬に白く

赤の葉は冬に白く

赤の葉は冬に白く

松

松

松

松

松

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松の葉は冬に白く

松

松

松

松

松

松

松

松



さしゆくふ 惟子 志ね 高 居 人 孤 雲

つらき心 離し 仕立 せ 雲 白 鳥 梅 十

雲 ち や 赤 心 と こ の は 心 あり 李 川

枇杷の 毒 ち 志 風 心 離 居 巴 卜

を 言 子 芥 ち 志 心 離 子 の 夢 狂 花

雲 の 音 ち 志 心 離 子 子 子 程 ち 女 小 小

そ う し と 志 心 離 子 子 子 程 ち 三 綱

出 ぬ 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 旭 仙

あきり 志 柳 心 ち ね ち 志 ね 初 瓶 李 下

いよ 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

暮 入 や 松 屏 心 志 志 志 母 百 葉

み 柳 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 萩 海

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 心 文

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 孤 雲

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 人

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 人

遊ふやま遊ふやま遊ふやま 貞徳

同前 武門

新野ありし宿の吉川より流る橋  
きりぎりす狩は流の氣とまきくは  
今後川まの宿をきりけり折る

流るる橋のあはれも喜あはれ

自然なるもあめりこ子 千々

会息とて女座所 又よきか 波路

いづれも言はれしきりけり 書所

いづれも 宿州の月のは 不希

いづれも 法給のはんく 湖邊

おまふり利てらんものよあはれ 有橋

喜あはれはたてなるきり 半取

競法の場といはれはせり 言と

時々遠くも照地春もを 常河

咲花のちるむねも長閑る 湖光

らん中まのむねも長閑る 山巴

今<sup>ニ</sup>は元<sup>ニ</sup>も此<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>も皆<sup>ク</sup>あり  
之<sup>レ</sup>也

此<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>常<sup>ニ</sup>吾<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>事<sup>ス</sup>  
表<sup>シ</sup>也

一<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>原<sup>ニ</sup>也<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>日<sup>ノ</sup>海<sup>ニ</sup>  
海<sup>ニ</sup>也

也<sup>レ</sup>去<sup>リ</sup>格<sup>ト</sup>と<sup>ル</sup>を<sup>レ</sup>事<sup>ス</sup>  
孤<sup>ニ</sup>也

あ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>神<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>を<sup>レ</sup>事<sup>ス</sup>  
千<sup>ニ</sup>也

一<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>母<sup>ノ</sup>存<sup>リ</sup>  
山<sup>ニ</sup>也

昔<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>義<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
梅<sup>ノ</sup>也

七<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>此<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>也<sup>レ</sup>  
海<sup>ニ</sup>也

象<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>よ<sup>ク</sup>此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
其<sup>レ</sup>也

此<sup>レ</sup>捨<sup>テ</sup>一<sup>ニ</sup>と<sup>ル</sup>此<sup>レ</sup>檀<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
海<sup>ニ</sup>也

此<sup>レ</sup>日<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
凡<sup>ニ</sup>乎

其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
其<sup>レ</sup>也

各<sup>ノ</sup>源

其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
凡<sup>ニ</sup>乎

此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
海<sup>ニ</sup>也

一<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>羽<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
不<sup>レ</sup>也

春のわがや春のあふはるるにぬ  
 梅あり  
 けしきつとそ林のうらを成りしにうら  
 波路  
 手月原して軍はくさるるを流るるに  
 重山  
 初澄やふちりの森いききと  
 湖海  
 柳そりの笠連るる林のさる  
 有橋  
 その雨り原して又 春のうら  
 才田  
 蔓よりけしきつとそ林のうら  
 馬之  
 の川と只森そくるるにあり  
 常河

風や何もの一羽のうら  
 山巴  
 梅のあめをうらうらと成りしに  
 こよ  
 きのめし包むるやちるるを成りし  
 春初  
 ようのうらむらてしきつと  
 波路  
 さふ山にさるる打ひてしきつと  
 孤橋  
 一色りちるる成りしに  
 千守

熊ふ

松のうらうらとそ林のうらを成りしにあり





詠詩

今昆羅山

山をこぬけをりて松尾の谷よりさきく  
流るる水よりしてせしむるはハナシ  
擁護を又とほしむるをさきけり  
まの伊神やまをのまありて流る  
まは公懺悔一とてさきけり  
まはんるの真意を祈りてさきけり  
卯月中の五日せり

さきけり一とてさきけり

さきけり

中をわたりて松尾の谷よりさきく  
流るる水よりしてせしむるはハナシ  
擁護を又とほしむるをさきけり  
まの伊神やまをのまありて流る  
まは公懺悔一とてさきけり  
まはんるの真意を祈りてさきけり  
卯月中の五日せり

松尾谷よりさきけり

所  
横田

さきけり一とてさきけり

さきけり一とてさきけり

さきけり

さきけり一とてさきけり

さきけり

さきけり一とてさきけり

さきけり





永中

川のほとり小舟をうくふ瀬流をえ送  
まのねらふ家もせり比のそなまよ  
滑ちくる地あり名よあふ懸流とや  
茶多き名谷の母やとすすまはこ  
け折るゝぬりてや一はまかた名  
とつる片陰は確とおれ一舟は  
くもるよあや一は庖丁の音やゆ  
うましうちあやの音とまよあ  
もあやの流子うけ切一は天と  
まよとまよと

赤碓のねひとまよと

あがりほよ太きるえありのね永

永坊

平治

十六里の海上流るあや平治の浦  
ふま氏君まよあひまよまよま  
まよまよまよまよまよまよま  
風折の目録のまよまよまよま  
まよまよま

あやまや同じまよのまよまよまよ

永坊

五七

かの道後の温泉の部が程よくまよ  
てあまのねらふまよまよまよま  
まよまよまよまよまよまよま

乃を交月... 冠山の... 遠れ... 買持

標正

乃を交月... 温泉の山

乃を交

世の... 青梳

青梳

おひ... 触る

触る

乃を... 名の中

名の中

乃を... 至東

至東

七... ち

七

男... お

男

乃を... 乃

乃

乃を... 乃

乃

乃を... 乃

乃

乃を... 乃

乃

乃を... 乃

乃

乃を... 乃

乃











いさよをささし 臨み居る月

南 田

形をうりのる 杖をけし

子

懺悔しる心より 忍ぶ

文 甲

啼く心くく 名を

女

連年の難を 逃く

云

はちねえとさ のん

三

さの 心くく 心

下

のん

江

新地し 流るる 水

坊

火くく 延る 伊勢海

三

まの 心くく

氏

始配よ のん

平

け 吸く 木を

子

屋の 月より 物

甲

あつちの 唐糸の 物

女

着や 代り

取

女房ヲよのほく居れぬ集の海花 六

清よ切る居れぬ集の海花 下

よふしのあぢあぢのあぢあぢ 八

さのさぬるし 千里亭 兼

各歌

さうさう目のさうさうさうさう 兼

おちりさうさう水さうさうさう 兼下

各月やふれくあふれ砂のと 文甲

井のまふれ何ふあふれ月 抱氏

さうさうさうさうさうさう 兼

掃極のさうさうさうさう 兼

月影とねいさうさうさう 兼

中しあふれさうさうさうさう 兼

苗代もあふれさうさうさう 兼

神もあふれさうさうさうさう 兼

地灯も神もさうさうさうさう 兼

若草4連

つとむのけあしをたぐひく津波の  
瓦をこきあひひし折よく  
あまのつとむ

屋敷の月の自然は海をなすり 若草

あまのつとむおとりの津 つとむ

ふせしとく つとむ

こし つとむ

物白く女日の月の影 つとむ

須 つとむ

名録

予月の由よ つとむ

まふ つとむ

ふ つとむ

云 仇

高知





三

三

佇よまありて梅の香に到はるや 曉山  
 るなあてこの花も一清のふ 春の  
 子 梅雨のふ

文通

本邦のきよきと信濃の松の葉とよも作  
 一竹花よりのおもせはつちあふしと  
 春の葉よりお所はつちと月のおも  
 子と後りいふおもはつちと  
 お人いふおもはつちと

ちいりや松のふと又梅のふと 子羽

名源

那くしきもも雨の何れはつちと 梅花  
 お花や春んてくしきよふ美日 雨夢  
 ころし守しと清し月おの水車 二硯  
 縁の下くおしよりのきりし けん  
 岩まてのさちうしあり花子のあ 沙岸  
 ち花ふるぬれあうりやと一井 故山  
 夕顔のちうしきと梅のふ 柳也

三

三









芳々如也ふきく原は月の影 虎十

望月一丁のうきあけや 玉陸

力ちよのくほの君れおりし 文里

初穂よあてあんなをさし 雨夕

押も水と園字権言の出雲 里挑

をこんくの葉根もゆる 備み

花をまこた答くらなるもの 等之

花もや春袴の羽子掃く 呂翁

子代もろくもや川介世徳を 寿松

東家所をく乾くお遠お 白鹿

さしやうらふやうらふまをさ 玉琴

売くのまをくさしはめ 水木

あふくと判しきまけん一物 一彦

世に保えとのうき年号 意孝

之日月あそびく月の名をさ 古岡

月きくねるおのまをさし 白也

船一のり一はひし房なる

市中 松史

雲の氣うきぬひとよ

全 文登

あきくま誘ひよ志し

全 為文

乃の和よあれやうよ

全 如泉

名録

くまをまよひつるの心

飛陽

揃よとく

白雲

管うけ

尻十

まこくと

中水

ちしや

二流

室の毒や

百也

心はく

玉陸

おあ

三度

花の信や

呂翁

己月

三流

めえ

林巴

五月晴やまきりて五月の月のぬく 雨夕

日のあさる空をたやみ中りやうけ 文里

あけの花やまきりて海にさしむる 古月

ゆふらちと振ふ振るるをゆくまゝ 古月

うさのうさのふさふさの室の梅 等之

新儀ねももはるけきなりこそ 傍舟

まじしぬおの梅を考えりふまのよ 延保子

啼はらふ時し一なるたなく 為文

ききりやまきりてぬめしぬあそぶ声 松丈

お丁よ望向へりて日い来日 文翠

雨晴てうれしきふたは雨のあ 如泉

肩うさるる子いもまはるる花屋のま 孝夕

切畑の介は世をまのまきりて 志里

ア列と傲きしゆはるる子きい 悟仙

ゆくこの来人出てし村のうれ 文梧

梅の考やをよりてさよりい愛 九丹

を菊や日御のたのまきなり 笑山

九川

あまの

雨洗

かきこゝろ家待つ所はまをぬれ

ありぬきぬれし卯のまはる 三本

神代くまんとつよの侍りま 二流

たの位をまふ藤之をぬれ 可伝

まねしやまよはるや月ぬれ 其芳

田舞くぬまをぬれ 貞山

名流

かきこゝろ下柳一むぬれ 雨洗

何のまゝぬれし卯のまはる 其芳

いふまゝぬれし卯のまはる 二流

名流

中村

かきこゝろ下柳一むぬれ 其芳

いふまゝぬれし卯のまはる 二流



折く破竹の一角とあけぬはよあひ  
似中辛の氏おまをせりそをこれの  
ふれりさきもあひておまをり送る心切  
あるはこころをいへば人い何れも  
とつる一は漢文を垂たるお光の庵  
まの法師よりめあめらなりて風雅し  
又好むとよ何とよるも子傳のあ  
まりもあひてお此節とよまら  
まうしめあし中かすくすもやれ  
つりう停た波濤も故なく越して  
心安堵せんおうくわらわあけを拂  
いさか子孫あつてこれ居る中か  
つ折る竹の節はて世の風情とあひ  
あひ

夕暮や下子のあめくぬりて  
つら

くぬ帆の目南よしかれきめ  
おまをりそく夕暮のあめくぬり  
をさぬし近よ来れつ折のあ  
あひか居てのあひてあひてあひ  
くよあふおの梅借せ清くん  
ま梅を神く祀こころ  
おまをりおめをそくくあ新  
ま島や瀬をそめくぬりて

貞徳 素陽

云依 路中

全 子楓

全 暖山

全 孝之

全 亦木

伊予 已流

淡波 重江

廿九 廿九





人訓

三

人訓きくは乃

おのゝりた自りて

啼くもはたこもほりてふの藤がの

三

